

# "Urajio Nippou" and the War in Siberia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/18329">http://hdl.handle.net/2297/18329</a>

# 「浦潮日報」の成立と「シベリア出兵」

橋 本 哲 哉

## 目 次

### はじめに

- I 「シベリア出兵」と極東・ウラジオストク
  - II 和泉良之助とジャーナリストのデモクラシー
  - III 「浦潮日報」の創刊
  - IV 記事の若干の分析
- おわりに —「シベリア出兵」と在留日本人—

### はじめに

1980年代の後半は、環日本海をめぐる地域間の交流が、かつてとは状況を大きく異にして、長足なる進歩をみせた。韓国における「民主化」、中国における経済開放政策、そしてソ連（本論では、まだこの国名を使用する）のペレストロイカが具体的には進行したからである。従来、戦後だけに限ってみても何回か日本海をめぐるこうした交流の盛り上がるの機会があり、「日本海時代」といった表現でそれなりの対応が企画されたことがあった。しかし、今回は相手側の積極的な姿勢という点から見ると、まったく新しい交流の様相が描き出されているとってさしつかえない。

これに比べて、とくに日本海側の各県・地域からは、対岸地域に対するさまざまなアプローチがなされた。1990年は、いろいろな試みのひとつのピークの年で、「環日本海時代」という言葉もほぼ定着したとってよく、以降各

地でさまざまな交流の試みが工夫された。そうした折、ソ連における1991年8月のクーデター、およびその失敗後の連邦解体に至るまでの激動は、環日本海交流の先行きも左右しかねない問題をもたらしている。そして1991年から92年にかけての猛烈なインフレは、とくにシベリア・極東部との交流にとって大きな障害となりはじめている。しかし、その将来はもちろんこうした暗い面だけではない。ポスト冷戦は朝鮮半島にもおよび、また、これまで没交渉だったモンゴルとの交流のチャンスも到来しつつある。

現状の問題はともかくとして、1990年以降、筆者もその専門の歴史の領域から対岸地域との交流に関する若干の研究をおこない、また一定の研究交流にも関わってきた。蛇足として付け加えるならば、教育面の交流（といっても、いまのところ一方通行であるが）もすすんでいる。金沢大学の国際化が一挙にすすめられたこともあって、とくに中国からの留学生を数多く抱え、その教育負担に追われているのも1990年以降の特徴である。そうした国際交流の一環に、ウラジオストクの極東国立総合大学東洋学部の4人の学生を経済学部は迎えてもいる。その4人を国費留学生として受け入れるように尽力したが、それをつうじて「環日本海」が東京・文部省サイドにも通用するキーワードになっている状況を確かめることができた。

さて、1990年3月、ソ連のイルクーツク経済大学において開催された「地域の社会経済問題に関するソ日シンポジウム」に、同僚の山村勝郎・村田武教授、藤井一行教授（富山大学）とともに招かれるという経験をもった。そのシンポジウムにおいて、筆者は「北陸地域におけるシベリア・極東部との貿易・交流の展開」なる報告をおこなった<sup>1)</sup>。対岸交流といった視角での歴史研究に、従来、筆者は取り組んでこなかったので、報告を作成するに際して、少し手を広げて調査・研究を試みてみた。次の3つの論文はそうした作業の結果として公刊したものである。論文のタイトルだけを紹介しておく①「戦間期石川県における県外移出入状況と諸産業の展開」（金沢大学経済学部『経済学部論集』第10巻1号 1989年12月刊）②「戦前期北陸地域を中心とした対岸交流観の検討」（同前、第10巻2号 1990年3月刊）③「永井柳太郎の植民論・シベリア論」（金沢大学経済学会『金沢大学経済論集』第27号 1990年3月刊）である。

ソ連におけるシンポジウムをきっかけとした研究交流は、有形無形のさまざまな刺激や成果となりつつある。それはソ連や日本の現状にかかわる点が多い。なかでもイルクーツクの研究者が、バイカル湖の汚染問題から環境保護に強い関心をもっていることに注目したい。ペレストロイカに直接関与していることからそれはもっともではあるが、彼らは歴史研究にはあまり興味を示さなかった。しかし、「シベリア出兵」が街のあちらこちらに刻印されており、この歴史的事象のけっして軽くないことを感じないわけにはいかなかった。この「シベリア出兵」とペレストロイカ（とくに、そこにおける地域経済の自立）をつなぐ細い糸に、短命ではあったが「極東共和国」の問題や「シベリア地方主義」といった動きがあったことも承知した。これらの問題について、日本ではわずかな研究蓄積しかないようである<sup>2)</sup>。極東共和国は「シベリア出兵」末期（1920年4月～22年11月に存在）に、日本干渉軍との直接対決を避けるため、バイカル湖から沿海州にいたる地域（サハリン州とブリヤート自治州は除く）に作られた緩衝国である。国民議會を最高機関とした議會制共和国であったが、選挙結果より見るとロシア共産党の影響力がきわめて強い政体であった。短期間ではあったが人民革命軍を組織し、広くシベリア地域の住民を結集して、日本軍を撤退に追い込む勢力を展開した。シベリア地方主義は、ロシア革命前の20世紀初頭において、ヨーロッパ・ロシアに対して従属的立場ではなく、「生活の全領域における植民地と本国の平等化」「土地を農民に、自主自立を地方に」を基本的主張として、シビリヤーク（地元出身者）の運動を組織した思想である。その意味ではナロードニキの支流とってよいが、革命後中央集権化が強まるなかで、その運動は押え込まれてしまった。このシベリア地方主義が極東共和国成立にまったく影響を及ぼさなかったのか否かなど、解明するべき論点が今よみがえりつつあるとってよからう。

ソ連・イルクーツクにおける研究交流をつうじて得た重要な情報のひとつに、これから検討する「浦潮日報」がある。この新聞は戦前のある時期に、ウラジオストクと日本との関係、あるいはウラジオストクを中心とした対岸地域での日本人の活動を、具体的に知りうる数少ない資料であることを教えられた。ウラジオストクにおける保存状態は今のところはっきりとは確認で

きていないが、福井県敦賀市に残っているのではないかという情報も得た。敦賀市内を早速調査してみたが、市立図書館に保存されていた。本論文はその簡単な調査報告もかねている。残念ながら、まだ日本国内の他地域の調査はできていない。「浦潮日報」については、まだよくわからない点が多いので、取りあえずその成立期に関する序論的分析であることをあらかじめお断わりする。

なお、この1990年のシンポジウムの後、別ルートで交流したウラジオストクの極東国立総合大学には、こうした歴史的なテーマに関心をもつ研究者がいる事実が判明した。1991年10月に「とやま・ソ連沿海地方文化交流シンポジウム」が開催されたが（その主要のテーマは120年前にシベリア単独横断した嵯峨寿安に関する研究交流であった）、それに参加された同大学歴史学部長リム・サミグレン教授は、20世紀初頭のウラジオストクを中心とした日本人の存在・活動を確認する研究報告をおこなった。内容は日本国内における研究からみれば必ずしも高い水準ではない。しかし、それは従来の研究交流の乏しかったことの表われで、資料の点を含めて新しい知見も多く提出されている方をむしろ評価したい。シンポジウム後、サミグレン教授と懇談する時間を得たが、ここで取り上げようとしている「浦潮日報」をウラジオストクで見た記憶があるとも述べられた。このルートの調査は、いずれ同地を訪問するチャンスがあると思うので、今後の課題として残しておこう。

## 1 「シベリア出兵」と極東・ウラジオストク

以下、本論の分析をおこなう前提として、「浦潮日報」の成立と関連があったと考えられる「シベリア出兵」について、正当な評価を与えておかなければならない。少しおおげさに言うならば、ソ連、シベリア・極東部との対等な交流をすすめるにあたって、ソ連側が越えなければならないハードルはシベリア抑留問題であるが、日本側にもハードルはあると考える。それが「シベリア出兵」である。千島問題は双方にとって共通の課題であろう。シベリア抑留問題の扉は、ソ連側から徐々に開けられつつある。しかし、現在はソ連側が受け身なのであまりクローズアップされてはいないが、この「シベリ

ア出兵」は、深い傷跡となってソ連国内、とくにシベリア・極東部各地に残っていると推察するのである。

そこで、「シベリア出兵」に関する最近の日本側の研究成果のうち、重要だと考える部分を若干検討しておこう。ロシア史とソ連研究について、和田春樹は新しい問題提起を出し続けているが、1975年の「『シベリア出兵』をシベリア戦争とよぶことについて」（『岩波講座日本歴史』18、近代4、付録「月報」）において、従来のシベリア出兵研究を批判する視角を提出した。そして、日本が極東ロシアにおいておこなった帝国主義的行為を「トータルにつかむ必要」性を強調した。これをうけて研究は新展開を見せたが、原暉之『シベリア出兵』は、和田の問題提起を受け止めたところの、最新の本格的な研究とってよかるう。この『シベリア出兵』は、これまでの原暉之の研究の集大成で600頁にも及ぶ大著であるので、主に本論の関心にそった部分の紹介にとどめざるをえない。

原の「シベリア出兵」に対する問題意識は、きわめて鮮明である。その「まえがき」の部分で次のように述べる。「布告なしに戦端を開き、膨大な人員と戦費を注ぎ込み、しかも持続的な抵抗闘争と国際的非難をうける中で敗者として撤退しなければならなかったこの戦争は、近代日本の歴史上見逃しえぬ重要性をもっている」。そして「干渉戦争としてのシベリア出兵を全面的に解明しようとする機運」（これは前述した和田の提起以降のこと）のうえに、この研究が成し遂げられたとするのである。したがって「シベリア出兵」における日本軍の行動、革命への干渉、反革命政権との密着性について、きわめて密度の濃い分析を提示している。さらに、現地シベリアにおける抵抗闘争は、ほぼ明らかにされたと考えてよい。もちろん、原の言うように参謀本部の戦史をはじめとして、戦争の解明は従来なされてきてはいたが、長らく「軍事極秘」の扱いをうけるなど、客観的、批判的検討は少なかった。というよりも、その多くは「あたかも被害者は日本側であったかのように描く一面的で感情先行的な出版物」<sup>3)</sup>であった。原は、日ソおよびアメリカの大量の資料を駆使して干渉戦争の全容を解明しており、そこにこの研究の意義が、まづもってあることは言うまでもない。

さらに、シベリア内外のさまざまな勢力や情報収集グループを利用しつつ、

ソヴィエト政権の転覆をはかり、それに続いてそこを自国の勢力圏にしようとする動き、とくに日本軍がかかわりをもった勢力・グループの活動が、かなりの程度明らかにされたと考える。それらは、当時の日本人のシベリアに対する関心の深さを推測させるに十分な内容であるといえる。本論で考察しようとする「浦潮日報」も、後述するように資料として分析対象となっている。

こうしたシベリアに関する日本人の基本的知識とか考え方について、筆者は前掲論文②で、一定の検討を試みておいた。主張点のひとつのポイントは、日本人のシベリアに対する関心は、日露戦争前後から「シベリア出兵」期にかけて一挙にたかまり、日本人の平均的認識もこの時期に形成されたと考察したところにある。その認識形成に貢献した論者の一定部分は、もちろんシベリアを実際に調査し、あるいは見聞した人々であったが、たんなる論説に過ぎない見解の表明も少なくなかった。本論の内容と関わらせると、現地における在留日本人の動向などは、当時は考察の対象とはなっていなかったといつてよい。この点は原にも少し共通した問題で、原の著書『シベリア出兵』の数少ない不足部分であるが、したがって、それを補うことは、本論の課題ともなるのである。あえて言うならば、シベリア・極東部の在留日本人の動向を追うことによって「シベリア出兵」の干渉戦争としての意味が、より具体的に明らかになるのではないかと考えている。

次の表1をご覧願いたい。

それは「シベリア出兵」前後の時期のウラジオストクの在留日本人数の動向を示しているが、シベリア・極東部（戦前におけるロシア領アジアとほぼかさなる地域）のなかで最も日本人の多いところであったことがわかる。その人口は、日露戦争後に増加しはじめ、「シベリア出兵」期にピークをむかえているが、その終了とともに激減している。ウラジオストクは「シベリア出兵」に際して、日本軍の出入口であったことも含めて、日本の最重要拠点であったわけである。ついで表2は、ウラジオストクにおける日本人の位置を見ようとしたものである。第1次大戦直前の資料であるが、全人口の中で、やはりロシア人が過半数と圧倒的に多くを占めており、日本人は第4位で約2%である。しかし、以下見るようにそこでは商業者を中心に、相当の経済

表1 ウラジオストク在住の日本人居留民人口の動向

	ウラジオストク			ロシア領アジア		
	男	女	計	男	女	計
1906年	2,266	1,064	3,330	2,890	1,805	4,695
1909	843	736	1,579	1,808	1,792	3,600
1912	1,237	1,157	2,394	2,210	2,368	4,578
1915	1,103	1,001	2,104	2,214	2,340	4,554
1916	1,527	1,155	2,682	2,641	2,360	5,001
1917	1,815	1,337	3,152	2,885	2,642	5,527
1918	2,156	1,450	3,606	2,586	1,903	4,489
1919	3,151	2,764	5,915	4,290	4,005	8,295
1920	2,843	2,229	5,072	3,821	3,205	7,026
1922	1,323	1,361	2,684	6,678	4,424	11,102
1923	476	243	719	2,101	1,535	3,636
1924	476	243	719	1,998	1,369	3,367

註) 各年次『日本帝国統計年鑑』より作成。1921年のデータは記載されていないので、割愛した。

表2 ウラジオストク市の人口 (1913年現在)

ロシア人	53,957
中国人	26,787
朝鮮人	8,210
日本人	1,830
欧米人	1,480
合計	94,931

註)『浦塩斯徳事情』(巖松堂書店)より作成。

的活動をおこなっていた。

当時日本で発行されたウラジオストク案内の類は、かなりの点数にのぼると考えられるが、そのなかから日本人の活動を詳細に紹介する済軒学人編『浦潮斯徳事情』(巖松堂書店)が、基本的な参考文献である<sup>4)</sup>。それはおおよ次のような内容を持っている。まず地勢・気候等の一般的状況から始まって、役所・学校といった公共施設の案内、そして商工業・貿易・交通等の経済事情が解説されている。後半は「在留日本人の状態」が詳しく紹介されており、日本人が経営する商店やその主な職業については、個人名が一覧となっている。さらに「本邦商人の注意すべき露国の商習慣」や各法令も掲載されているのである。

第1次大戦期のウラジオストクには、日本はもちろんアメリカ・イギリス・フランス・中華民国をはじめとして9か国の領事館が設置され、名実ともにシベリア・極東部の玄関口・主要港であり、中心都市であった。日本との貿易に関しては、これも前掲論文②ですでに述べているので、ここでは触れない。そうした交流の古い歴史もあって、日本人の在留者が早くから存在して



いたのであるが、日本人会の前身である同胞会は、日清戦争前に設立されていたようである。日露戦争中に一時閉鎖を余儀なくされたが、戦争直後、かえって組織が強化され、以降在留日本人の結束の中心的役割を担ったと考えられる。

在留日本人の多くは商業および関連業種で、その大部分は、貿易に何らかのかかわりをもっていた。こうした人々に情報を提供し、かつ、在留日本人相互の交流の場となったのが「浦潮日報」であった。

## II 和泉良之助とジャーナリストのデモクラシー

「浦潮日報」の創刊号があるので、1917年12月9日に第1号が発行されたことは明白である。発行所はウラジオストク市内の浦潮日報社、発行・印刷人は和泉良之助となっている。この新聞が創刊された1917年は、ウラジオストクの在留日本人が増加しはじめ、活況を呈してきた時期にあっている。発行人の和泉は、当時のウラジオストクの有名人であったようで、現地も含めてもうすこし時間をかけて調査をしたいと考えている。和泉に関して、現在判明している限りの情報を以下簡単に整理する<sup>5)</sup>。それを通じて、和泉の思想的背景を考える何らかの手がかりを得られるだろう。

和泉良之助の経歴を追っていくと、明治大正期におけるロシア通の一群(それは二葉亭四迷あたりを出発点としたロシア研究者の人脈とも言換えることができる)から、さらには大正デモクラシーのなかで一定の役割を果たしたジャーナリストの人脈のふたつのグループにゆきつく。

和泉は1871年の生まれで、茨城県鹿島郡九十九里の出身。苦学して二松学舎から早稲田に進んだが卒業せず、日清戦後、東京高等商業学校(現、一橋大学)付属外国語学校(1899年に分離され、現東京外国語大学)の露西亜語科に再入学した。ここで長谷川辰之助(小説家の二葉亭四迷)に師事するのである。二葉亭は優秀なロシア語学生を養成するが、和泉はその人脈の一員として、そこで多くの友人と交わることができた。日露戦争時には、はじめて第3軍下第9師団付の軍事通訳の職を得、ロシア語の能力を発揮する場を持った。日露戦後まもなく、理由は定かではないがウラジオストクに渡り、

二葉亭の紹介で浦塩斯徳日本人会の役員、現地ロシア語学校教員の職に就いた。ここから和泉のウラジオストクにおける活動が始まる。

最初に知己を得たのは東洋学院の東洋学者E・スパルウィン教授（のちに在日ソ連大使館員として日本でも交流）で、後年影響を受けたジャーナリスト大竹博吉との接点を作った人物でもある。東洋学院は極東国立総合大学の前身である点は、記憶しておくべき事実である。もうひとつ和泉の大切な経歴は、ウラジオストク入りしてまもなく「大阪毎日新聞」の通信員を引き受けたことである。

当時の新聞各社は、現在のように世界各地に支局を置く余裕をまだ持っていないので、特派員や通信員を活用していた。専門の相手国を持った腕利きの記者は、例えばロシア特派員<sup>6)</sup>として、各社を渡り歩いて仕事をしてきた時代であった。和泉を大阪毎日新聞社に推薦したのは、ロシア特派員大庭柯公であったという説がある。もちろん、この大庭と先輩特派員二葉亭は懇意の間柄であったから、この説の真びよう性は高い。和泉はまだロシア問題の専門家ではなかったが、大阪毎日とすれば現地に住み着いて活動を始めようとする和泉に期待するところは大きかったのであろう。そしてこの通信員としての経験は、言うまでもなく浦潮日報社の経営の基礎となった。

大庭柯公から先の人脈には、大正デモクラシーの一翼を担ったジャーナリストの一群がいる。ロシア通と大正デモクラシー、その接点の大庭や大竹博吉の果たした役割を論ずることに大いに興味をそそがれる。しかし本論の課題ではないので、象徴的な出来事である白虹事件についてのみ言及する。

白虹事件は1918年に「大阪朝日新聞」が引き起こした筆禍事件である。当時の同紙は、鳥居素川編集局長のもとに長谷川如是閑・大山郁夫らを擁して大正デモクラシーの「戦闘部隊」<sup>7)</sup>であった。米騒動に対する寺内内閣の言論抑圧政策に抗議して全国的な記者運動が展開していたが、その内容を伝える記事中の「白虹日を貫けり」という一節とらえ、内務省は朝日攻撃をおこなったのである。鳥居・長谷川・大山をはじめ、東京朝日のグループ（このなかに大庭柯公もいた）さらには客員寄稿家の河上肇ら京大教授、櫛田民蔵らデモクラットも次々と変節する朝日と絶縁していった。大新聞社から離れた記者たちや知識人は、例えば鳥居は「大正日日新聞」、長谷川・大山は「我等」、

河上は個人雑誌『社会問題研究』と新たな言論活動の場を求めた。大庭はそれらにいずれも関わり、また日本社会主義同盟の発起人に名を連ねるなど「民主主義の燈」<sup>8)</sup>を守る一員としての立場を保ち続けた。その後大庭は新生「読売新聞」の編集局長を2年ほど勤めたあと、革命ロシアに旅行中に行方不明となるが、途中ウラジオストクで和泉と接触した可能性は充分考えられる<sup>9)</sup>。

ロシア革命後のウラジオストクは、ヨーロッパ側から撤退してきた新聞各社の特派員達の表舞台で、とくに「シベリア出兵」後は情報発信の拠点となった。そのなかで活躍する記者の一人に前出の大竹博吉（ナウカの創立者）がいた<sup>10)</sup>。大竹は印刷工から身を起し、東京日日新聞・読売新聞記者時代に江口渙・細川嘉六・新居格・青野季吉・市川正一らとともに社会主義への関心を深めた。ロシア革命に触発されロシア語学習をかねてウラジオストクに渡り、前出のスパルウィン教授のもとで勉強しながら記者としての仕事もおこなった。大竹は東方通信社（共同通信社の前身）の初代支局長を勤め、ウラジオストク在留の日本人記者の先進的部分で、1922年5月には日本軍早期撤退を求めた「浦潮居留民大会」なるものを組織したりしている。この大会開催には和泉も協力をしており、和泉に対する大竹の影響力を認めることができよう。大竹にはロシア関係書の訳書や著書がたくさんある。

浦潮日報社を中心とした和泉の活動は次節で述べることにして、彼の経歴の先を急ごう。「シベリア出兵」の終了、日本軍の撤退に時を合わせて在留日本人も一斉に帰国を開始（1922年10月）したが、和泉は少し遅れて同年末に、主だった社員は翌23年初めにウラジオストクを引き上げた。帰国後、一時特派員としてモスクワ・レニングラードを訪問したり、日本各地でロシア問題の講演をしたりする日々を過ごしたが、1931年2月、和泉は惜しまれつつ60歳でこの世を去った。

さて、和泉の思想の評価であるが、それを直接述べることはまだ差し控えておきたい。和泉の代表的な著作は『極東の変局』『極東共和国まで』<sup>11)</sup>のふたつがあるが、いずれも「浦潮日報」の記事（和泉が社説などで執筆したもの）を編集した構成となっている。後に若干分析するように、それらは「浦潮日報」の新聞としての性格を考えると彼の思想がストレートに反映されているとは断定しにくい。また、ウラジオストクにおいて、軍部と一定の接触

の機会もあったようである。さらに、戦前の知識人にはよく見られることであるが、「シベリア出兵」などの戦争の展開する最中においてはナショナリストとしての側面が浮き上がっているし、一方では上述したように大正デモクラシーの一角に位置した可能性も考えられる。当面は、そうした大きな幅の中に和泉を座らせておこう。

### Ⅲ 「浦潮日報」の創刊

「浦潮日報」の創刊日は、前述したように1917年12月9日であるが、浦潮日報社の活動はそれより早く始まっていたようである。明らかにロシア革命前の写真の中に社の看板が写っているからで<sup>12)</sup>、おそらくそれは、大阪毎日の通信員(あるいは通信社)としての看板であったのだろう。その通信員の和泉は、「革命の来ることが、少しも分からなかった」「電報が露都から来なくなり、何が何だか分からないうちに、浦塩も動揺と不安に忽ち包まれて了った<sup>13)</sup>」という感想を残している。大変動を予知できず、情報不足のなかでジャーナリストとしての責任感が、在留日本人に対する新聞発行に和泉を走らせたといつてよかろう。また、日本人会の役員として、不安のあまりに動揺する同胞に、何とか日本からのニュースを伝える必要性を感じたにちがいない。できあがったばかりのソビエト臨時政府沿海州委員会に請願書を提出したところ、比較的簡単に発行の許可がおりた(1917年7月)。在留日本人からの出資や協力をえてすぐに発行準備を進めたが、創刊までに半年もの時間を有したのは、活字・紙などの必要資材が用意できなかったからである。

新聞はおおよそA3判の大きさで、後掲の目次に示しておいたように平常は4頁建てである。これを当初は印刷工も含めて12名、うち編集局員は和泉を加えてもわずか3名で発行したという。その後出入りした記者も含めて、いずれも「一騎当千の人材」であったと紹介されているので、それを参考に関係者を略述する<sup>14)</sup>。

創刊時の記者は野田寿(長崎地方紙の出身、一年程で病死)・田淵義一で、ふたりとも20歳代の若手であった。田淵は早稲田出身、「時事新報」の特派員を兼ねていた。帰国後は大阪朝日新聞に入社した。新聞発行が軌道に乗り始

めると、次々に新しい顔ぶれが加わった。山内封介は電報通信社記者で、1918年主幹として入社し、シベリア各地に従軍して現地取材に活躍した。その見聞をもとに後掲の『シベリア秘史』のほか『浦潮と沿海州』（1943年刊）などの著書を残している。ロシア語が達者で、文学書の翻訳やレーニンの著作の翻訳（例えば、『ロシアにおける資本主義の発達』）でも知られている。中山貞雄は父親が熱心なギリシャ正教徒であったためニコライ神学校に学び、牧師の資格を取得した。ペトログラードで露日協会の仕事に携わっているときに山内に誘われて入社、外報部長を勤めた。社員のまま大阪朝日新聞社にも属し、「浦潮日報」「朝日新聞」の両紙に特報記事を書き続けた。広岡光治は極東露日協会事務局時代に大竹博吉と交遊し、大竹がモスクワ特派員に転出したあと東方通信社支局長となる。広岡も浦潮日報社員と掛け持ちしていたわけである。後出の高井邦彦もロシア語に堪能で、ロシア語版の「浦潮日報」を担当した。主だった記者は以上の通りであるが、その多くは日本の新聞・通信社員を兼任していた点が注目される。

現在までのところ、「浦潮日報」は1918年2月の第56号まで、欠号があるので42号分を入手している。2カ月半の間に56号を数えた訳であるから、仮に同じペースで発行され続けたとすると、年270号、和泉がウラジオストクを去る1923年の初めには1,400号の多きを数えた計算となる。はたしてその推算どおりか否かは、もうすこし調査を続行してから判断したい。

「『浦潮日報』は到々、約三千五百号を以て閉鎖の止むなきに至りました」<sup>15)</sup>。この資料は1931年正月、最後までただ独りウラジオストクに残留した社員高井邦彦の、和泉に宛てた賀状の一節である。高井はロシア婦人と結婚していたので現地に踏み止まったと思われるが、3,500号とはにわかには信じ難い数字である。1923年以降、日本人はほんのわずかししか残留できなかったからで、同時に発行していたロシア語版の発行号数を含めてのことではなからうかと推定している。

この「浦潮日報」の一部が、福井県敦賀市立図書館に残されていた理由をまだ明らかにしていない。敦賀において少しヒアリングをしてみたが、つぎのことしかわかっていない。図書館への寄贈者は、上田とだけ記録されている。浦潮日報社の日本国内唯一の支局が「敦賀市大島町上田貞聚」となっ

ているので、この本人かその家族が寄贈したのではなかろうか。敦賀周辺の調査も他日を期したい。

次にこれまでに筆者が収集した成立期「浦潮日報」の主要記事の目次を掲げて、概括的な分析を試みてみよう。

## 「浦潮日報」主要記事目次

- 第1号 (1917年12月9日・2頁, 以下頁略)「発刊の辞」「本社創立小史」「祝辞」(浦塩 斯徳駐在総領事菊池義郎・沿海州代理官ミリイフ等)
- 第2号 (1917年12月11日・4)「創刊を祝して上」市川寅太郎「祝辞」(日本居留民会会 頭代理伊藤薫・労兵会長アリューチン等)「露米協会支部発会式」「狼兵会」
- 第3号 (1917年12月12日・2)「創刊を祝して下」「露米協会に対する米人の感想」「革命 奇談馬泥棒伝一」「電報一休戦条約の成立」「浦潮旭会の義士会」「狼兵会」
- 第4号 (1917年12月13日・4)「休戦条約交渉の曲折」「憲法議会と選挙」「馬泥棒伝二」 「露都電報」「休戦条約に関する別電」「国民代表会の諭告」「シンピリスク号の遭難」 「雑報」「狼兵会」
- 第5号 (1917年12月14日・4)「領事団抗議書 付労兵会の回答」「馬泥棒伝三」「西伯利 開拓此人録一」「憲法議会と選挙二」「雑報」「狼兵会」
- 第6号 (1917年12月15日・4)「吾人の態度」「第二回極東商工会議一」「革命奇談露西亜 道鏡の墓一」「露都電報」「露都帰客談」「浦潮市会」「バザール」「狼兵会」
- 第7号 (1917年12月16日・4)「ペンとインキの時代」「西伯利開拓此人録二」「第二回極 東商工会議二」「露西亜道鏡の墓二」「此人録二」「露都電報」「自衛部慰問バザー」「花 山帳一」「一人心中」「狼兵会」
- 第8号 (1917年12月18日・4)「甚だ迷惑であります」「此人録三」「露西亜道鏡の墓三」 「露都電報」「第二回極東商工会議三」「皇女の亡命」「花山帳二」「従弟の家で」「拳 銃所有者の注意」
- 第9号 (1917年12月19日・4)「露国に対する日米両国の応援振り」「対露命令航路に就 て」「露西亜道鏡の墓四」「露都電報」「露都近信」「東清鉄道のストライキ」「阿片吸 飲場へ忍び込むの記」「花山帳」「印度人泥棒を撃退す」
- 第11号 (1917年12月22日・4)「御先棒国民」「対露命令航路に就て」「露西亜道鏡の墓五」 「ニコリスク便り」「阿片吸飲場へ忍び込むの記四」「石油缶盗賊を撃退す」「浦潮だ より」「花山帳」
- 第12号 (1917年12月23日・4)「順取逆取」「何故に戦争を継続すべきや」「此人録四」「露 西亜道鏡の墓五」「イ市電報」「北半球の宝庫カムチャッカ半島上」「春が来たので」 「職工長射殺さる」「強盗捕縛さる」「阿片吸飲場へ忍び込むの記四」
- 第13号 (1917年12月25日・4)「何故に戦争を継続すべきや続」「露国財政現状及支出す

- 算一」「怪傑レーニン」「イ市電報」「北半球の宝庫カムチャッカ半島下」「博徒鉄棒を奮て仲間を撲殺す」「浦潮だより」「阿片吸飲場へ忍び込むの記五」
- 第14号 (1917年12月26日・4)「経済界の窒息」「露国財政現状及支出予算二」「怪傑レーニン二」「労兵会会議」「流言蜚語」「浦壩斯徳婦人界」「花山帳」「浦潮だより」
- 第15号 (1917年12月27日・4)「何故に戦争を継続すべきや続」「露国財政現状及支出予算三」「怪傑レーニン三」「ハ府・ハルビン市・イーマン電報」「沿黒龍州代理官ルサーノフ氏辞任後拘禁せらる」「浦壩斯徳婦人界」「街上通信 積雪中より惨死体を発見す」「花山帳」「浦壩だより」
- 第16号 (1917年12月28日・4)「東京通信」「何故に戦争を継続すべきや続」「露国財政現状及支出予算四」「怪傑レーニン四」「イ市・ニコライフスク・武市電報」「露国銀行団の決議と徴発令に就て」「兇漢白昼魔薬コロロホルムを使用して大金を奪ふ」「昨朝の出火」「花山帳」「金角吟社の先を張りて」
- 第17号 (1918年1月1日・4)「明けまして御目度う」「浦潮のお正月」「浦潮の歳晚」「雑報」「日本商工会臨時総会」「銀行の支払制限と徴発令に就て」「市況概況」「浦壩斯徳婦人界」「白昼太田良三郎商店を襲ふ」「三人の支那強盗家族を縛しピストルにて脅迫」「窃盗捕えらる」「サモフル会」
- 第26号 (1918年1月17日・4)「日本帝国軍艦入港に対する浦壩斯徳市会の抗議書」「過激派天下を取るの記」「露都・日本内地電報」「イルクーツスク市在留邦人の消息」「軍艦石見訪問記」「浦壩斯徳婦人界」「六名の露賊ピストルの砲口を揃て咽喉に擬す」「コーヒ店」
- 第27号 (1918年1月18日・4)「協商列国の利害上」「過激派天下を取るの記」「イルクーツスク市通信」「露都電報」「軍艦石見訪問記」「浦壩斯徳婦人界」「辻強盗盛に猛威を揮ふ」「コーヒ店」
- 第28号 (1918年1月19日・4)「協商列国の利害下」「過激派天下を取るの記」「浦潮日本小学校論」「日本内地電報」「露国人側の軍艦入港観」「イルクーツスク市通信」「浦壩斯徳婦人界」「薄暮堂々と徒党を組んで吾人は枕を高くしてねむる能はざるか」
- 第29号 (1918年1月22日・4)「無題一東」「浦潮日本小学校論」「日本内地電報」「イルクーツスク市通信」「浦壩斯徳婦人界」「発砲しつつ露賊の集団鈴木商店公達連を包圍す」
- 第30号 (1918年1月23日・4)「東京だより」「露都・日本内地電報」「敦賀に於ける滞貨」「露人の投売り」「浦壩斯徳婦人界」「官立女学校全焼す」
- 第31号 (1918年1月24日・4)「処女の危機」「露都電報」「イルクーツスク市通信」「レモンの好望」「民兵深夜雪を冒して活躍す轟然暗夜の静寂を破る銃声」
- 第32号 (1918年1月25日・4)「処女の危機続」「連合国は人道と正義の為に戦ふも国内政には干渉せず」「日本内地電報」「議会解散抗議の市会」「露人の困難」「日本菓子店の好況」「コリケネオイ中学校焼く」「恐れながら」「去国三巴遠一ノウオニコライスク市帰客談」
- 第33号 (1918年1月26日・4)「善隣国の一民として露国国民に訴ふ上」「日本内地電報」

「浦潮日報」の成立と「シベリア出兵」 (橋本)

- 「議會解散反対連合大会」「時局観」「浦潮斯德婦人界」「強盜福泰棧を襲ふ殺人魔来」  
「新聞記者の想出」「去国三巴速」
- 第34号 (1918年 1月27日・4)「善隣国の一民として露国国民に訴ふ中」「東京通信」「露都・日本内地電報」「時局観」「鉄道の乱脈」「花山伝」「駄馬大に暴れる」
- 第35号 (1918年 1月29日・4)「善隣国の一民として露国国民に訴ふ下」「英国の海軍」「露都・日本内地電報」「政友会の態度」「外国人本邦入国に関する件」「浦潮斯德婦人界」「浦デン評判記」
- 第36号 (1918年 1月30日・4)「昔の浦潮」「露都近信」「日本内地・露都電報」「露貨の下落」「野次馬大挙して賊を追ふ」「浦デン評判記」
- 第37号 (1918年 1月31日・4)「昔の浦潮」「憶故一等水兵石川要君」「日本内地電報」「露英協会講演会」「浦潮斯德婦人界」「肉切り包丁にて横腹を抉る」
- 第38号 (1918年 2月 1日・4)「彼此両様情」「露都婦客談」「日本内地電報」「ハルビン近況」「時局観」「浦潮斯德婦人界」「怪火バザールを焼く」
- 第39号 (1918年 2月 2日・4)「日本小学校論を読みて上」「日本内地・露都電報」「時局観」「軍隊婦休令」「六百の細民製粉所にて暴行を働く」「日露商行又々襲はる」
- 第41号 (1918年 2月 5日・4)「浦潮だより」「東京通信」「日本内地電報」「支那輪禁解除内定」「生徒の同盟休業」「麦粉問題」「贅沢品の売行」「時局観」「兇賊隊を成してウエルサル旅館を襲そふ」「松尾商店の盜賊」「自動車小供を轢く」
- 第42号 (1918年 2月 6日・4)「斯の盜賊の横行を如何と観る」「各地通信」「日本内地・ハ府電報」「金融界」「時局観」「ウエルサル旅館盜難詳記」「麻袋の中に赤児の屍体」「続花山帳」
- 第46号 (1918年 2月10日・4)「在留日本国民に望む下」「露国会社法三」「日本内地電報」「緹株の購入案」「義勇民兵隊の設立」「続花山帳」
- 第47号 (1918年 2月13日・6)「金角湾頭の紀元節」「貨幣欠乏」「政權の移転」「義勇民兵隊」「露国会社法三」「日本内地電報一浦潮近況等」「朝日艦上の紀元節」「沿海州庁廃止」「花山帳」「金角湾頭琵琶の響」「小人大金を抱いて罪あり」「旅先より」
- 第48号 (1918年 2月14日・4)「小銃の処分」「露国民法会社法一」「日本内地・露都電報」「朝日艦上の紀元節二」「国庫の占領」「花山帳」「民兵探索犬を使用して活動す」「老支那人の頓死」
- 第49号 (1918年 2月15日・4)「果して真の平和か」「露国民法会社法二」「日本内地電報」「皮革製造所没収」「郵便駅主の罷業」「入国令と為替禁止令」「花山帳」「郡会議長襲撃せらる」「村会議長銃殺さる」「過激派解散」「露都婦客談」
- 第50号 (1918年 2月16日・4)「漸進と急進」「露国民法会社法二」「日本内地電報」「ハバロフスク通信」「皮革及同製品取扱者の注意」「民兵隊の總會」「各地紙幣発行」「花山帳」「民兵の大活動遂に大賊の片破れを捕縛す」「避難民救助大会開催さる」「浦天会勇士の軍艦慰問」「イルクーツスクより」
- 第51号 (1918年 2月17日・4)「日露親善の急は今日より急なるはなし」「露国民法会社法三」「日本内地電報」「金融機関と過激派」「白楊材積出禁止」「アリヨール号の乗



組員」「労働者近状一」「監獄の併合」

第52号(1918年2月19日・4)「国民政府の宣言に就て」「露国民法会社法三」「日本内地電報」「シベリア銀行閉鎖」「日本商工会報」「労働者近状二」「金融機関と過激派」「当地碇泊船舶」「花山帳」「悪魔団デパートメントストア、チューリン支店を襲ふ」「浦デン会の軍艦慰問」「各地通信」

第53号(1918年2月20日・4)「レーニン先生に與ふる書」「露国民法会社法五」「日本内地電報」「ヤクーツク州糧食委員会代表者」「露英商業協会」「カレージン將軍の自殺」「朝鮮米の価格」「労働者近状三」「花山帳」「チューリン支店盜難詳報」「賊窓ガラスを破り忍び込む」「露都通信一」

第54号(1918年2月21日・4)「カレージン將軍の自殺」「露国民法会社法六」「日本内地・露都電報」「見放されたる浦港」「軍隊の衝突」「白楊材禁輸解除」「西伯利艦隊の命令」「武装解除」「花山帳」「他殺?自殺?疑問の死体」「狂婆孫をゆでてかちる」「露都通信二」

第56号(1918年2月23日・4)「沿黒龍州に滿州産穀なしには存立する能はざるか下」「露国民法会社法八」「經典其儘の聖都一」「日本内地・露都電報」「税関引渡問題」「紙の飢饉」「輸送状態一」「敦賀貿易商組合の通牒」「将校のカザック村移住」「花山帳」「浦潮体育会主催の下に柔拳闘の競技会開催去る」「赤色紅君隊誤勇士の大痛事」「浮世塵箱」

#### IV 記事の若干の分析

最後に、上掲の成立期「浦潮日報」の記事内容を、分析しておくことにしよう。

「浦潮日報」の創刊の経緯からみることにするが、「発刊の辞」「本社創立小史」(第1号、以下「浦潮日報」の掲載号数のみを注記する)にはつぎのような記述がなされている。従来、外国新聞の発行が禁止されていたが、ロシア革命後「言論出版結社の自由」が認められ、日本新聞発刊の期待にやぶるようになった。これによって日本のニュースをいち早く在留日本人に伝えるとともに、「日露両国民相互の理解に基づける親善」に貢献し、結果として「将来我同胞に無形の統一と進歩を」与える、とその抱負を披瀝している。創刊号らしい気負いも見られるが、「浦潮日報」がたんに日本人社会だけに通用する新聞としてだけでなく、日ソの「親善の機関」として意識されていたことがわかる。それは続いて掲載されている各方面の「祝辞」にも感ぜられる事柄でもある。

しかし一方では、ウラジオストクの革命後の環境、ソ連政府から発行許可を得る経緯を見れば、日ソの「親善」を謳うことは浦潮日報社の存在条件であったともいえる。さらにいえば、「親善」は在留日本人にとって両手をあげて同意できるテーマでもあった。新聞発行に際してそのスポンサーは在留日本人であったし、読者の大半も彼らであったわけであるから、「浦潮日報」の論調は彼らの意識から大きく踏みはずした内容とはなりえなかった。

次に、内容面でいくつか特徴的な傾向を取り出して整理する。まず第1に目立つのは「露都電報」という速報形式で、ロシア中央の革命後の政治社会情勢が伝えられている点である。電報は前半の号に多く、例えばそれは次のように紹介されている。「15日発 ○ロストフ方面に於て過激派の暴動あり、本月3日より13日に亙りて下士カデット等一方は赤旗近衛兵の間に戦闘あり」(第9号)。「労兵農中央執行委員会は議會を解散せり」(第31号)。「モスクワ市は目下饑饉の状態に在り、パン一人8分の1斤宛なり」(第34号)。電報形式の記事は中央だけではなくシベリア・極東部からもあり、「21日イルクーツク市に於て士官学校生徒(立憲派)と衛戍兵(過激派)間に衝突起り市街戦を開始し負傷者を出す」(第12号)。「ハ府電報 ○極東地方議會連合会成る」(第15号)。

こうした速報的なニュースは、やがて後に「過激派天下を取るの記」「イルクーツク通信」といったような記事で詳しく解説される。これも内容を少し紹介しておこう。

「過激派天下を取るの記」は露都野坂生の筆者名で、5回の連載となっている。残念ながら内2回分は欠号部分に入っているので、正確な連載開始号は不明であるが、おそらく第24号から始まったのではなかろうか。判明する3回分は、「冬宮攻撃」「冬宮占領」の小見出しがつけられていることからわかるように、ロシア革命のクライマックスのひとつであるペテルスブルグをめぐる動きをくわしく伝えている。

「イルクーツク通信」も4回の連載である。これは第27号からはじまっているので、その全容を見ることができる。筆者名は記されていないが、イルクーツクの在留「一邦人」の通信となっている。革命のシベリア都市での、具体的展開を示す資料として興味深い。「砲弾と血」と「大火に包まれ」

た様子や「停車場の惨劇」をくわしく述べているが、革命に対しては必ずしも好意的には書かれていない。前掲の「シベリア出兵」のなかで、原は「イルクーツクの市街戦」の一節を設けているが、その内容とは対照的である。原によると、当時イルクーツクには127名の在留日本人がいたが、「居留民会長」は日本参謀本部の「諜報の密命を帯びて潜入していた」人物であったとしている<sup>16)</sup>。

新聞のもうひとつの役割は、ロシア国内各派の「機関紙」の社説を翻訳し紹介している点である。読者に極東の情勢をなるべく客観的に判断させるためには、有効な働きをしたと考えられる。

第2の特徴点は、これも電報形式であるが、日本の情勢を伝えていることである。後半の号では「露都電報」の情報量が極端に少なくなり、革命後の動きは、この日本を通じてのニュースが大半を占めるようになる。これらも2～3例を取り出して紹介する。

「米価の暴騰、大根の暴騰」(第34号)「予算案に対する政友の意向」(第39号)「増廃税案と衆議院」「社会主義者の検挙」(第47号)。国会における政党の動きや、物価動向、社会問題と日本国内の電報内容は多彩である。また、外国の情報もある。「奥国労働者平和を叫ぶ」「重要なる巴里会議」(第34号)「独逸に内変続出」(第38号)「米国民の激昂」(第47号)。さらに日本経由の革命情勢として、「労兵農中央執行委員会は議會を解散せり」(第31号)「黒龍江沿岸の危機」(第32号)「過激派大臣暗殺さる」(第34号)「極東過激派は極東自治会を組織し独立を図る」(第37号)。

電報であるので、いずれも内容はきわめて簡潔であるが、在留日本人が多方面のニュースを渴望していたことが予測される。それはたんに何か情報を得ようとしていたり、故郷のたよりをなつかしんでいたのではなからう。革命から「シベリア出兵」と激動する異国にあって、自分自身の身の処し方を判断する手がかりを必死に得ようとしていた結果であろう。

第3は、ウラジオストクの在留日本人社会をめぐる様々なニュースで、この記事がもっとも多い分量を示している。そのうちのひとつは、対岸における日本人の経済的な活動を具体的に報じている。一例に「日本商工会臨時総会」(第17号)をみてみよう。革命後に成立したウラジオストクの食糧委員会

が、物資徴発令を公布した。その徴発令によって「物価卸売買禁止せられたる為に商人は大恐慌を来」たしており、その具体的な対応策をどうするかといったことを、在留日本人が真剣に検討している様子を伝えている。次第に困難な情勢が到来しているにもかかわらず、そのなかでいかに生き残りをはかっていくか。それが在留日本人の最大の課題であったわけである。

原前掲書『シベリア出兵』の4「革命の東漸」は、見開きに1917年のウラジオストクのメーデーの写真を掲載している。大通りに、道一杯のいわゆるフランス式デモが展開されている場面の写真である。そして1917年2月から10月、シベリア・極東部への革命運動の拡張をくわしく論じている。続いて、11月革命直後の極東部の状況に原は触れているが、われわれの当面の関心とも重複するので少し次に引用する。

革命後、日本では極東の政情の不安定を誇大に取り上げたため、かえって在留日本人が迷惑に感じていたとし、「浦潮日報」の引用をしている。「我々は二、三日前に内地の或新聞社より『御地騒擾の詳細を打電せられたし』との電報を接受せるが何の意なるか解する能はず差当たり『目下の処当地は平穩無事なり我内地人が余りに露領方面の物騒を誇大に報道するを以て惹いては商業上に影響を及ぼし商人等は迷惑を感じ居る者少からず』と返電し置けり」<sup>17)</sup>。日本語の新聞発行それ自体が、当地の安定ぶりを逆に示してさえたのである。

ところが、在留日本人の保護を理由として軍隊の派遣が計画され、その先兵として1918年の正月早々、戦艦石見・朝日がウラジオストクに入港した。それ以降、皮肉なことに在留日本人をめぐる環境は日々悪化の一途をたどったのである。戦艦の派遣は、革命干渉の一環であることが現地でも認識されてしまったからであろう。正月過ぎからの「浦潮日報」の見出しだけを追ってみても、おおよその見当がつく。次第に日本人に対する風当たりが厳しくなり、ついには「六百の細民製粉所にて暴行を働く」(第39号)といった事態に発展した。在留日本人側もやむなく、自警団を組織するといった対応に迫られた。まさに「シベリア出兵」が、現地の在留日本人の存在を否定するところとなってしまった。この点は、後に山内封介『シベリア秘史』がより事態を鮮明に説明している。山内は記者として極東にかかわった目で、「我が国の

西伯利亞出兵は、一体何んな結果を齎したであろうか<sup>18)</sup>と自問する。そして「チェック軍救援」「満鮮国境に対する過激派の影響防止」のふたつによって「悪結果以外に何物をも得られなかった」<sup>19)</sup>と論じた後、「居留民の生命財産保護に就いても」、前二者と同様であったとする。「我軍の浦潮を撤退するに及ぶや同地の居留同胞も多く一切を放棄して内地へ引き揚げてしまった」<sup>20)</sup>と述べるのである。

第4は「浦潮日報」と敦賀との関係である。敦賀は国内唯一の支局のあったことは前述したが、第56号に若干の記事「敦賀貿易商組合の通牒」が見られる。内容を簡単に要約すると、ウラジオストク港における船積み荷物が増加するなかで、積み込み個数のチェックが不十分となり、再三積み荷に不足が生じるようになってきた。ウラジオストク側の嚴重なる管理を要求するというものであるが、日本との取り引き量は神戸・名古屋より敦賀港の方が多いいった内容もそのなかにうかがえる。当時のこうした貿易などの交流の厚みがあったことが、敦賀に支局が置かれた背景であったのだろう。

以上、「浦潮日報」の記事の4つの特徴を考察してきたが、最後に結論を兼ねてもうひとつ重要な指摘をすることにしよう。

### おわりに — 「シベリア出兵」と在留日本人 —

成立期の「浦潮日報」はすでに考察したように、ウラジオストクの在留日本人に対して、内外の情報を素早く伝達する重要な役割を負ってきた。それは対岸における日本人の活動、とくに経済的活動に多大な援助となり、現地に順応して粘り強く展開された在留日本人の活動を支えた。しかし革命後、日本政府はまったく何の根拠もなく、彼らの意志に反して「在留日本人の保護」（これは現在でも都合よく使用される国際的な用語である）の名目で軍艦を派遣し、それを突破口に革命への干渉を開始していった。その結果、現地には当然のことながら対立や軋轢が発生していったのである。

第26号の「日本帝国軍艦入港に対する浦塩斯徳市会の抗議書」はロシア側の反応の代表例である。それは「魯領在留の内外人民に対する保護は魯国民の設置する官憲の任務」であるとし、「日本軍艦の入港又は碇泊」はかえっ

て日露「両国民間に一層の不安を惹起する」と主張している。もっとも、「露国人側の軍艦入港観」(第28号)にあるように、ロシア人の間には、革命に対する立場の相違によって、日本軍艦への見方は微妙な食い違いをみせていることも事実であったが、さきの市会の意見表明はそれ以前の基本的な事柄であったというべきであろう。しかし、事態は日に日に深刻の度を増していった。

そうした状況の下にあって、「浦潮日報」はどのような態度をとり続けたのであろうか。筆者が今のところ入手している最後の号は第56号で、1918年2月23日に発行されている。その時期は、まだ「シベリア出兵」が本格化しておらずそうした条件のもとではあるが、次の「日露親善の急は今日より急なるはなし」(第51号)にみられる論調に注目したい。

まず、ウラジオストクは「唯一の露日接触地点」とし、「露日協会支部開設」が待望されると述べる。そして「露国は今や国を挙げて潰裂四出収拾すべからざる状態に在り。就中極東露領は欧露とは連絡断絶し、政治的にも経済的にも日々に窮迫を告げつつあり」とその窮状を指摘する。そうしたなかで「欧露のみに依頼するの不可なるを認め、極東自治の必要を自覚するに至れるに対して、一葦帯水の我国たるもの片時も袖手傍観を許さざるなり」という現代にも共通する認識を示す。そのうえで「露日親善の急は蓋し今日より急はなかるべし」と強調するのである。「極東自治」は現在、環日本海交流とワンセットとなって、シベリア・極東部において盛んに述べられる見解でもある。すでに指摘したように、こうした思想の始点のひとつにシベリア地方主義があったと思われる。ロシア側の問題としては、それが一定の歴史の流れとなり、現代まで継続しているのか否かは検証に値する。また日本側としては、そうした「極東自治」を真の意味で支持し、場合によっては在留日本人がその自治の一員として構成されるべきであると希求していたのか否か、これも現代にある程度通ずる問題とってよかろう。

国家の利害が優先され「シベリア出兵」の危機が次第にたかまるなかで、「浦潮日報」は、その最前線にあってなおかつ平和的な交流を呼びかけ、日露親善の評論を掲げた。この延長線上に1922年5月の「居留民大会」開催がある。これは大竹博吉や和泉良之助が、在留日本人に呼びかけて開かれた重要な意味を持つ大会である。その宣言を見ると、撤兵した場合には「迫害」や「脅

威」,そして「極度ノ経済的枯渴」が予想されるが,そのことよりも駐兵を継続したならば「露国民ノ誤解ヲ招」き,「交通杜絶通商回復不可能」となることを大いに恐れるとしている。結論的には一刻も早く撤兵し,「在留邦人ノ将来ニ於ケル対露貿易ノ地盤回復」<sup>21)</sup>を図ることを強く求めている。事態を冷静に見たうえで,現実的な見通しであったというべきであろう。しかしながら,「侵略」といわざるを得ないような「出兵」は,在留日本人の予想をはるかに上回るような傷跡をシベリアに与えていったのであった。

【註】

- 1) この報告は英文("Development of Trade and Exchange with Siberia and the Far East")である。その全文は,金沢大学経済学部『経済学部論集』第12巻第1号(1991年12月刊)に掲載されている。邦文の原稿は,北陸経済調査会『北経調季報』No. 18(1990年7月刊)に収録。なお,同シンポジウム全体に関しては,同前『北経調季報』の村田武報告を参照してほしい。
- 2) 極東共和国については原暉之『シベリア出兵』(筑摩書房,1989年6月刊)の20岐路に立つ日本,それ以下を参照。そのほか一例だけを紹介すると,上田秀明『極東共和国の興亡』(アイスペックプレス社,1990年刊)がある。また,シベリア地方主義については原前掲書の12自治シベリア臨時政府を参照。
- 3) 以上は,原前掲書のまえがき i ~ ii。
- 4) 以下は,濟軒学人編『蒲湖斯徳事情』(巖松堂書店,1915年刊)。
- 5) 以下は,桧山邦祐『和泉良之助一『蒲湖日報』の創設者』(サンケイ新聞生活情報センター,1981年3月刊)を参照。
- 6) その戦前期の活躍を紹介した著作として,古本昭三『ロシア特派員』(ナウカ,1991年11月刊)がある。
- 7) 松尾尊允『民本主義の潮流』(文英堂,1968年3月刊)155頁。
- 8) 同前,167頁。
- 9) 大庭柯公に関しては,橋本哲哉「戦前期北陸地域を中心とした対岸交流観の検討」(金沢大学経済学部『経済学部論集』第10巻第2号)のなかで若干の私見を提示してある。大庭についての従来の評価として,菊地昌典『ロシア革命と日本人』(筑摩書房,1973年12月刊)があるが,それとは意見を異にする。菊地は大庭「我観西伯利」(1918年5月)を取り上げてシベリア出兵を無批判に「翼賛」したかのように分析するが,同時期の「西伯利論」(『日本及び日本人』1918年4月)に示された論点も含めて再評価する必要があると考える。なお,『柯公全集』(全5巻,柯公全集刊行会,1925年刊)がある。
- 10) 大竹会『大竹博吉 遺稿と追憶』(ナウカ,1961年刊)を参照した。

「浦潮日報」の成立と「シベリア出兵」 （橋本）

- 11) 和泉良之助『極東の変局』（磯部甲陽堂、1919年12月刊）、同『極東共和国まで』は筆者は未見である。『極東の変局』には、筆者が収集している最終号（1918年2月23日号）より後の1919年4月25日の記事まで一部分収録されているが、それは分析しない。
- 12) 桧山前掲書、70頁。
- 13) 同前、79頁。
- 14) 同前、90～96頁。
- 15) 同前、3頁。
- 16) 原前掲書、142頁。
- 17) 以上は、1917年12月22日付けの記事のようであるが、原も実際には「浦潮日報」を見てはおらず、また筆者も欠号部分であるので同じく見ていない。原の注記にあるように、この資料は、和泉前掲書『極東の変局』6頁より再引用で、原の誤植は訂正してある。
- 18) 山内封介『シベリア秘史』（日本評論社、1923年3月刊）1頁。
- 19) 同前、2頁。
- 20) 同前、3～4頁。
- 21) 以上は、桧山前掲書97～100頁。

(1992年1月10日成稿)